

校異源氏物語・藤のうらは

御いそぎのほども宰相の中将はなめかちにてほれくしき心ちするをかつ
はあやしくわかこゝろなからしふねきそかしあなちにかうおもふことならは
せきもりのうちもねぬへきけしきにおもひよりはたまふなるをきゝなからおな
しくは人はるからぬさまにみはてんとねんするもくるしうおもひみたれ給女君
もとゝのかすめ給しことのすちをもしさもあらはなにのなこりかはとなけか
しうてあやしくそむきくゝにさすかなる御もろ恋なりをとゝもさこそこゝろつ
よかり給ひしかとたけからぬにおほしわつらひてかの宮にもさやうにおもひた
ちはてたまひなはまたとかくあらためおもひかゝつらはむほと人のためもくる
しうわか御方さまにも人わらはれにをのつからかるくゝしきことやましらむし
のふとすれとうちくゝのことあやまりもよにもりにたるへしとかくまきはし
てなをまけぬへきなめりとおほしなりぬうへはつれなくてうらみとけぬ御中な
れはゆくりなくいひよらむもいかゝとおほしはゝかりてことくゝしくもてなさ
むも人のおもはむところをこなりいかなるつゐてしてかはほのめかすへきなど
おほすにやよひ廿日おほ殿の大宮の御き日にてこくらくしにまうて給へり君た
ちみなひきつれいきほひあらまほしくかむたちめなどもあまたまいりつとひ給
へるに宰相の中将をさくゝけはひをとらすよそほしくてかたちなとたゝいまの
いみしきさかりにねひゆきてとりあつめゝてたき人の御ありさまなりこのおと
ゝをはつらしとおもひきこえ給しよりみえたてまつるもこゝろつかひせられて
いといったうよをひしもてしつめて物し給ふをおとゝもつねよりはめとゝめ給み
す経など六条の院よりもせさせ給へり宰相の君はましてよろつをとりもちてあ
はれにいとなみつかうまつり給ふゆふかけてみなかへり給ほと花はみなちりみ
たれかすみたとくゝしきにおとゝむかしをおほしいてゝなまめかしうゝそ吹な
かめ給ふ宰相もあはれなるゆふへのけしきにいとゝうちしめりてあまけありと
人ゝのさはくになをなかめいりてゐ給へり心ときめきにみたまふことやありけ
ん袖をひきよせてなとかいとこよなくはかむし給へるけふのみのりのえにをも
たつねおほさはつみゆるし給ひてよやのこりすくなくなり行すゑの世におもひ
すて給へるも恨きこゆへくなんとの給へはうちかしこまりてすきにし御おもむ

けもたのみきこえさすへきさまにうけ給をくこと侍しかとゆるしなき御けしきには、かりつゝ、なんときこえ給心あはたゝしきあま風にみなちりくゝにきほいかへり給ぬきみいかにおもひてれいならすけしきはみ給つらんなどよとゝもにこゝろをかけたる御あたりなれははかなきことなれとみゝとまりてとやかうやとおもひあかし給ふこゝらのとしころのおもひのしるしにやかのおとゝもなこりなくおほしよはりてはかなきつゐてのわきとはなくさすかにつきつきしからんをおほすに四月のついたちころおまへのふちのはないとおもしろう咲みたれてよのつねの色ならすたゝにみすくさむことおしきさかりなるにあそひなとし給てくれ行ほとのと、色まされるにとうの中將して御せうそあり一日の花のかけのたいめんのあかすおほえ侍しを御いとまあらはたちより給ひなんやとあり御文には

わかやとの藤の色こきたそかれにたつねやはこぬ春のなこりをけにいと面白き枝につけ給へり待つて給へるもこゝろときめきせられてかしこまりきこえ給ふ

中くゝに折やまとはむふちのはなたそかれときのたとくゝしくはときこえてくちをしくこそおくしにけれとりなをし給へよときこえたまふ御ともにこそとの給へはわつらはしきすいしんはいなとて返しつおとゝの御まへにかくなんとして御覽せさせ給ふおもふやうありてものし給つるにやあらむさもすゝみものし給はゝこそはすきにしかたのけうなかりしうらみもとけめとの給御心をこりこよなうねたけなりさしも侍らしたいのまへの藤つねよりもおもしろうさきて侍なるをしつかなるころほひなれはあそひせんなどにや侍らんと申給わさとかひさゝれたりけるをはやうものしたまへとゆるしたまふいかならむとしたにはくるしうたゝならすなをしこそあまりこくてかるひためれひさむきのほとなにとなきわか人こそふたあひはよけれひきつくろはんやとてわか御れうの心ことなるにえならぬ御そともくして御ともにもたせてたてまつれ給わか御方にてこゝろつかひいみしうけさうしてたそかれもすき心やましきほとにまうて給へりあるしの君たち中將をはしめて七八人うちつれてむかへいれたてまつるいつれとなくおかしきかたちともなれとなを人にすくれてあさやかにきよらなる物からなつかしうよしつきはつかしけなりおとゝおましひきつくろはせなとし給ふ御よういをろかならず御かうふりなとし給ていてたまふとてきたのかたわかき女房などにのそきてみ給へいとかうさくにねひまさる人なりようひなといとしつかにものくゝしやあさやかにぬけいておよすけたるかたはちゝおとゝにも

まさりさまにこそあめれかれはたゝいとせちになまめかしうあひきやうつきて
みるにゑましく世の中わするゝ心ちそしたまふおほやけさまはすこしたはれて
あされたるかたなりしことほりそかしこれはさえのきはもまさり心もちゑをゝ
しくすぐよかにたらいたりとよにおほえためりなどの給ひてそたいめし給もの
まめやかにむへゝしき御ものかたりはすこしはかりにて花のけふにうつり給
ぬ春の花いつれとなくみなひらけいつる色ことにめをおとろかぬはなきを心み
しかくうちすてゝちりぬるかうらめしうおほゆるころほひこの花のひとりたち
をくれて夏に咲かゝるほとなんあやしう心にくゝあはれにおほえ侍るいろもは
たなつかしきゆかりにしつへしとてうちほゝゑみ給へるけしきありてにほひき
よけなり月はさしいてぬれと花の色さたかにもみえぬ程なるをもてあそふに心
をよせておほみきまいり御あそひなとし給うおとゝほとなくそらゑひをし給て
みたりかはしくしひゑはし給をさる心していたうすまひなやめり君はすゑのよ
にはあまるまであめのしたのいふそくにもものし給ふめるをよはいふりぬる人お
もひすて給ふなんつらかりける文籍にも家札といふことあるへくやなにかしの
をしへもよくおほししるらむとおもひ給ふるをいたうこゝろなやまし給ふとう
らみきこゆへくなんなどの給ひてゑいなきにやおかしきほとにけしきはみ給い
かてかむかしをおもふたまへいつる御かはりともにはみをすつるさまにもそこ
そ思給へしり侍をいかに御覧しなすことにか侍らん本よりおろかなる心のおこ
たりにこそとかしこまりきこえ給ふ御ときよくさうときてふちのうらはのとう
ちすし給へる御けしきを給はりて頭中将はなの色こくことにふさなかきを折て
まらうとの御さかつきにくはふとりてもてなやむにおとゝ

紫にかことはかけむふちのはなまつよりすきてうれたけれとも宰相杯をも

ちなからけしきはかりはいしたてまつり給へるさまいとよしあり

幾かへり露けき春をすくしきてはなのひもとくをりにあふらんとこの中将
にたまへは

たをやめの袖にまかへる藤の花みる人からや色もまさらむつきゝすんな

かるめれとゑひのまきれにはかゝしからてこれよりまさらす七日の夕つく夜
かけほのかなるにいけのかゝみのとかにすみわたれりけにまたほのかなる木す
ゑとものさうゝしき比なるにいたうけしきはみよこたはれる松のこたかきほ
とにはあらぬにかゝれる花のさまよのつねならすおもしろし例の弁少将こゑい
となつかしくてあしかきをうたふおとゝいとけやけうもつかふまつるかなとう
ちみたれ給てとしへにけるこのいゑのとうちくはへ給へる御こゑいとおもしろ

しおかしきほとにみたりかはしき御あそひにて物おもひのこらすなりぬめりやうく夜更行ほとにいたうそらなやみしてみたり心ちいとたへかたうてまかてん空もほとくしうこそ侍ぬへけれどこのいとこゆるつり給てんやと中将にうれへ給おと、朝臣や御やすみ所もとめよおきないたうゑひす、みてむらいなれはまかりいりぬといひすて、いり給ぬ中将はなのかけの旅ねよいかにそやくるしきしるへにそ侍やといへは松にちきれるはあたる花かはゆ、しやとせめ給中将は心のうちにねたのわさやとおもふところあれと人さまのおもふさまにめてたきにかうもありはてなむと心よせわたることなれはうしろやすくみちひきつおとこ君は夢かとおほえ給ふにもわかみいと、いつかしうそおほえ給けんかし女はいとはつかしとおもひしみてものし給もねひまされる御ありさまいと、あかぬところなくめやすし世のためしにもなりぬへかりつるみを心もてこそかうまでもおほしゆるさるめれあはれを知給はぬもさまことなるわさかなとうらみきこえ給少将のす、みいたしつるあしかきのおもむきはみ、と、めたまひつやいたきぬし哉なかはくちのとこそさしいらへまほしかりつれとの給へは女いき、くるしとおほして

あさきなをいひなかしける川くちはいか、もらし、関のあらかきあさましとの給さまいとこめきたりすこしうちはらひて

もりにけるくきたのせきを川くちのあさきにのみはおほせさなんとし月のつもりもいとわりなくてなやましきにものおほえすとゑひにかこちてくるしけにもてなしてあくるもしらすかほなり人くきこえわつらふをおと、したりかほなるあさゑかなと、かめ給ふされとあかしはて、そいて給ふねくたれの御あさかほみるかひありかし御文はなをしのひたりつるさまの心つかひにてあるをなかく、今日はえきこえ給はぬをものいひさかなきこたちつきしろうにおと、わたりてみ給ふそいとはりなきやつきせさりつる御けしきにいと、おもひしる、身のほとをたへぬ心に又きえぬへきも

とかむなよしのひにしほるてもたゆみけふあらはる、袖のしつくをなといとなれかほなりうちゑみて手をいみしうもかきなられにけるかな、との給もむかしのなこりなし御返いといてきかたけなれはみくるしやとてさもおほしは、かりぬへきことなれはわたり給ぬ御つかひのろくなへてならぬさまにて給へり中将をかしきさまにもてなし給ふつねにひきかくしつ、かくろへありきし御つかひけふはをも、ちなと人くしくふるまふめり右近のそうなる人のむつましうおほしつかひ給なりけり六条のおと、もかくときこしめしてけり宰相つねより

もひかりそひてまいり給へはうちまもり給てけさはいかに文なもののしつやさかしき人も女のすちにはみたるゝためしあるを人わろくかゝつらひ心いられせてすぐされたるなんすこし人にぬけたりける御心とおほえけるおとゝのみにきてのあまりすぐみてなこりなくくつをれ給ぬるをよ人もいひ出る事あらんやさりとて我かたゝけうおもひかほに心をこりしてすぎくしき心はへなともらし給ふなさこそおいらかにおほきなる心をきてとみゆれとしたの心はへおゝしからすぐせありて人みえにくきところつき給へる人なりなと例の教へきこえ給ことうちあひめやすき御あはひとおほさる御こともみえすすこしかこのかみはかりとみえ給ふほかくにてはおなしかほをうつしとりたるとみゆるを御まへにてはさまくあなめてたとみえ給へりおとゝはうすき御なをししろき御そのからめきたるかもんけさやかにつやくとすきたるをたてまつりてなをつきせずあてになまめかしうおはします宰相殿はすこし色ふかき御なをしに丁子そめのこかるゝまてしめるしろきあやのなつかしきをき給へることさらめきてえんにみゆ灌仏ゐてたてまつりて御導師をそくまいりければ日暮て御かたくよりはらはへいたしふせなどおほやけさまにかはらす心くにし給へりおまへのさほうをうつして君たちなどもまいりつとひてなかくうるはしきこせんよりもあやう心つかひせられておくしかちなり宰相はしつこゝろなくいよくけさうしひきつくるひていて給ふをわさとならねとなさけたち給わか人はうらめしとおもふもありけりとしころのつもりとりそへておもふやうなる御なからひなめれはみつもゝらむやはあるしのおとゝいとゝしきちかまさりをうつくしき物におほしていみしうもてかしつきゝこえ給ふまけぬるかたのくちおしさはなをおほせとつみものこるましうそまめやかなる御心さまなどのとしころこと心なくてすくしたまへるなどをありかたくおほしゆるす女御の御有様などよりもはなやかにめてたくあらまほしければきたのかたさふらふ人くゝなどは心よからすおもひいふもあれとなにのくるしき事かはあらむあせちの北の方などもかゝるかたにてうれしとおもひきこえ給けりかくて六条院の御いそきは廿よ日のほとなりけりたのいの上みあれにまうて給とてれいの御かたくいさなひきこえ給へとなかくさしもひきつゝきて心やましきをおほしてたれもくゝとまり給てことくしきほともあらす御くるま廿斗して御前なともくたくしき人数おほくもあらすことそきたるしもけはひことなりまつりの日のあか月にまうてたまひてかへさには物御覧すへき御さしきにおはします御方かたの女房おのくくるまひきつゝきて御まへところしめたるほといかめしうかれはそれとゝ

をめよりおとろくしき御いきほひなりおと、は中宮の御は、宮す所の車をしさせられたまへりしをりのことおほしいて、時により心おこりしてさやうなることなんなさけなき事なりけるこよなくおもひけちたりし人もなけきおふやうにてなくなりనికిとそのほとはの給ひけちてのこりとまれる人の中將はかくたゝ人にてわつかになりのほるめり宮はならひなきすちにておはするも思へはいとこそあはれなれすへていとさためなき世なれはこそなに事もおもふさまにていけるかきりのよをすくさまほしけれとのこり給はむすゑの世などのたとしへなきおとろへなとをさへ思はゝからるれはどうちかたらひ給てかむたちめなども御さしきにまいりつとひ給へれはそなたにいて給ぬ近衛つかさのつかひはどうの中將なりけりかのおほとのにていてたつ所よりそ人くはまいりたまふけるとうないしのすけもつかひなりけりおほえことにてうちとうくよりはしめ奉りて六条院なとよりも御とふらひともところせきまで御心よせいとめてたし宰相の中將いてたちのところにさへとふらひ給へりうちとけすあはれをかはし給御中なれはかくやむことなきかたにさたまり給ぬるをたゝならすうちおもひけり

なにとかやけふのかさしよかつみつゝおほめくまでもなりにけるかなあさましとあるをおりすくし給はぬはかりをいかゝ思ひけんいと物さはかしくるまにのるほとなれと

かさしてもかつたとらるゝくさのなはかつらをおりし人やしるらんはかせ

ならてはときこえたりはかなけれとねたきいらへとおほすなをこのないしにそおもひはなれすはひまきれ給へきかくて御まいりはきたのかたそひ給ふへきをつねになかくしうえそひさふらひ給はしかゝるつゐてにかの御うしろみをやそへましとおほすうへもつゐにあるへきことのかくへたゝりてすくし給ふをかの人もゝのしとおもひなけるらむこの御心にもいまはやうくおほつかなくあはれにおほししるらんかたゝ心をかれたてまつらんもあいなしとおもひなり給て此をりにそへたてまつり給へまいとあえかなるほともうしろめたきにさふらふ人とてもわかゝしきのみこそおほかれ御めのとたちなともみをよふことの心いたるかきりあるをみつからはえつとしもさふらはさらむほどうしroyasかるへくときこえ給へはいとよくおほしよる哉とおほしてさなんとあなたにもかたらひの給けれはいみしくうれしくおもふことかなひ侍る心ちして人のさうそくなにかのこともやむことなき御ありさまにおとるましくいそぎたつまきみなんなをこの御をいさきみたてまつらんの心ふかゝりけるいま一度み奉

るよもやといのちをさへしふねくなしてねんしけるをいかにしてかはとおもふもかなし其よはうへそひてまいり給ふにきて車にもたちたりうちあゆみなど人わるかるへきをわかためはおもひはゝからすたゝかくみかきたてまつり給ふたまのきすにてわかくなからうるをかつはいみしう心くるしう思まいりのきしき人のめおとろく斗のことはせしとおほしつゝめとをのつからよのつねのさまにそあらぬやかきりもなくかしつきすへたてまつり給てうへはまことにあはれにうつくしとおもひきこえ給ふにつけても人にゆつるましようまことにかゝる事もあらましかはとおほすおとゝも宰相の君もたゝこの事ひとつをなんあかぬ事かなとおほしける三日すこしてそうへはまかてさせ給たちかはりてまいり給よ御たいめんありかくおとなひ給けちめになんとし月の程もしられ侍れはうとくしきへたてはのこるましくやとなつかしうの給て物語などし給これもうちとけぬるはしめなめり物なとうちいひたるけはひなとむへこそはとめさましようみ給またいとけたかうさかりなる御けしきをかたみにめてたしとみてそこの御なかにもすぐれたる御心さしにてならひなきさまにさたまり給けるもいとことはりとおもひしらるゝにかうまてたちならひきこゆるちきりをろかなりやはとおもふ物からいて給ふきしきのいことによそほしく御手車などゆるされ給て女御の御有様にことならぬをおもひくらふるにさすかなるみのほとなりいとうつくしけにひゝなのやうなる御有様を夢の心ちしてみたてまつるにも涙のみとゝまらぬはひとつものとそみえさりけるとしころよろつになけきしつみさまくゝうきみとおもひくしつるいのちものへまほしうはれくゝしきにつけて誠に住吉の神もをろかならすおもひしらるおもふさまにかしつきこえてこゝろをよはぬことはたおさくゝなき人のらうくゝしかなれはおほかたのよせおほえよりはしめなへてならぬ御有様かたちなるに宮もわかき御心ちにいと心ことにおもひきこえ給へりいとみたまへる御かたくゝの人などはこのはゝ君のかくてさふらひ給をきすにいひなしなとすれとそれにけたるへくもあらすいまめかしうならひなきことをはさらにもいはす心にくゝよしある御けはひをはかなきことにつけてもあらまほしうもてなしきこえ給へれば殿上人などもめつらしきいとみところにてとりくゝにさふらふ人ゝも心をかけたる女房のよい有様さへいみしくとゝのへなし給へり上もさるへきをりふしにはまいり給御なからひあらまほしううちとけ行にさりとてさしすきものなれすあなつらはしかるへきもてなしはたつゆなくあやしくあらまほしき人のありさま心はへ也おとゝもなかゝらすのみおほさるゝ御よのこなたとおほしつる御まいりのかひあるさまにみ

たてまつりなし給て心からなれと世にうきたるやうにてみくるしかりつる宰相の君も思なくめやすきさまにしつまり給ぬれは御心おちゐはて給て今はほいもとけなんとおほしなるたいのうへの御有様のみすてかたきにも中宮おはしませはをろかならぬ御心よせ也此御方にも世にしられたるおやさまにはまつおもひきこえ給ふへければさりともおほしゆつりけり夏の御方の時にはなやき給ましきも宰相の物し給へはとみなとりくうしろめたからすおほしなり行あけむとしよそちになり給御賀のことをおほやけよりはしめ奉りておほきなるよいそき也その秋太上天皇になすらふ御くらゐえ給ふてみふくは、りつかさかうふりなどみなそひ給か、らてもよの御心になはぬことなけれとなをめつらしかりけるむかしのれいをあらためて院しともなとなりさまことにいつくしうなりそひ給へはうちにまいり給へき事かたかるへきをそかつはおほしけるかくてもなをあかすみかとはおほして世の中をは、かりてくらゐをえゆつりきこえぬことをなむ朝夕の御嘆きくさなりける内大臣あかり給て宰相の中将中納言になり給ぬ御よろこひにいて給ひかりいと、まさり給へるさまかたちよりはしめてあかぬことなきをあるしのおと、もなかく人におされまし宮つかへよりはとおほしなをる女君の大輔のめのと六位すくせとつふやきしよひのこと物のをりくにおほしいてければきくのいとおもしろくてうつろひたるを給はせてあさみとりわかはの菊を露にてもこきむらさきの色とかけきやからかりしをりのひとことはこそわすられねといとにほひやかにほゝゑみて給へりはつかしういとをしき物からうつくしうみたてまつる

ふた葉よりなたゝるその、菊なれはあさき色わく露もなかりきいかに心をかせ給へりけるにかといとなれてくるしかる御いきおひまさりてかゝる御すまひもところせければ三条殿にわたり給ぬすこしあれにたるをいとめてたくすりしなして宮のおはしまし、かたをあらためしつらひてすみ給ふむかしおほえてあはれにおもふさまなる御すまひなりせんさいともなとちいさき木ともなりしもいとしけきかけとなり一村薄も心にまかせてみたれたりけるつくろはせ給やり水のみくさもかきあらためていと心行たるけしきなりおかしきゆふ暮のほとをふたところなかめ給てあさましかりしよの御おさなさの物語なとし給に恋しきこともおほく人のおもひけむこともはつかしう女きみはおほしいつふる人とのまかてちらすさうしくにさふらひけるなとまうのほりあつまりていとうれしとおもひあへりおとこ君

なれこそは岩もあるあらしみし人のゆくゑはしるやゝとのまし水女きみ

なき人のかけたにみえすつれなくてこゝろをやれるいさらゐの水などの給

ほとにおとゝ内よりまかて給けるをもちの色におとろかさされてわたり給へり
むかしおはさゐし御有様にもおさゝかはる事なくあたりゝおとなしくすま
ひ給へるさまはなやかなるをみたまふにつけてもいと物あはれにおほさる中納
言もけしきことにかほすこしあかみていとゝしまりて物し給あらまほしくう
つくしけなる御あはひなれと女はまたかゝるかたちのたくひもなとかなからん
とみえ給へりおとこはきはなくきよらにをはすふる人ともおまへにところえ
てかみさひたることゝもきこえいつありつる御手習とものちりたるを御らんし
つけてうちしほたれ給このみつの心たつねまほしけれとおきなはこといみしく
との給ふ

そのかみのおい木はむへもくちぬらむうへしこ松もこけおひにけりおとこ

君の御さいしやうのめのとつらかりし御心もわすれねはしたりかほに

いつれをもかけとそたのむふたはよりねさしかはせる松のすゑゝおい人

ともゝかやうのすちにきこえあつめたるを中納言はおかしとおほす女君はあい
なくおもてあかみくるしときゝ給ふ神無月の廿日あまりのほとに六条院に行幸
あり紅葉のさかりにてけふあるへきたひの行幸なるに朱雀院にも御せうそこあ
りて院さへわたりおはしますへければ世にめつらしく有難きことにてよ人も心
をおとろかすあるしの院方も御心をつくしめもあやなる御心まうけをせさせ給
ふみの時に行幸ありてまつむまは殿に左右のつかさの御馬ひきならへて左右近
衛たちそひたるさほう五月のせちにあやめわかれすかよひたりひつしくたるほ
とにみなみのしん殿にうつりおはします道のほとんそり橋わた殿にはにしきを
しきあらはなるへき所にはせんしやうをひきいつくしうしなさせ給へりひんか
しのいけに船ともうけてみつしところのうかひのおさ院のうかひをめしならへ
てうをおろさせ給へりちいさきふなともくいたりわさとの御らんとはなけれと
もすきさせ給ふみちのけふはかりになん山のもみちいつかたもおとらねと西の
おまへは心ことなるをなかのらうのかへをくつし中門をひらきて霧のへたてな
くて御覽せさせ給ふ御さふたつよそひてあるしの御さはくたれるをせむしあり
てなをさせ給ふほとめてたくみえたれとみかとはなをかきりあるいやゝしき
をつくしてみせたてまつり給はぬことをなんおほしける池のいをゝ左少将取蔵
人所のたかゝいのきたのにかりつかまつれる鳥ひとつかひを右のすけさゝけて
しん殿のひんかしより御まへにいてゝみはしの左右にひさをつきてそうすおほ
きおとゝ仰こと給てゝうしておものにまいるみこたちかむたちめなどの御まう

けもめつらしきさまにつねのことゝもをかへてつかうまつらせ給へりみな御ゑいになりて暮かゝるほどにかく所の人めすわさとの大かくにはあらずなまめかしきほどに殿上のわらはへまひつかうまつる朱雀院の紅葉の賀れいのふる事おほしいてらる賀皇恩といふものをそうするほどにおほきおとゝの御おとこのとをはかりなるせちにおもしろうまふうちのみかと御そぬきて給ふおほきおとゝおりてふたうし給あるしの院きくをおらせ給てせいかいはのをりをおほしいつ色まさるまかきの菊をりくゝに袖うちかけし秋をこふらしおとゝそのお

りはおなしまひにたちならひきこえ給ひしをわれも人にはすぐれたまへるみなからなをこのきはゝこよなかりけるほどおほししらるしくれおりしりかほなりむらさきの雲にまかへるきくのはなにこりなきよのほしかとそみるときこ

そありけれと聞え給ふゆふ風のふきしくもみちの色ゝこきうすきにしきをしきたるわた殿のうへみえまかふにはのおもにかたちをかしきわらはへのやむことなきいへのこともとにてあをきあかきしらつるはみすはうゑひそめなとつねのことれいのみつらにひたい斗のけしきをみせてみしかき物ともをほのかにまひつゝもみちのかけにかへりいるほど日のくるゝもいとおしけなりかくしよそなどおとろくしくはせずうへの御あそひはしまりてふんのつかさの御ことゝもめす物のけうせちなるほどにこせんにみな御ことゝもまいれり宇多の法師のかはらぬ声も朱雀院はいとめつらしくあはれにきこしめす

秋をへて時雨ふりぬる里人もかゝるもみちのをりをこそみねうらめしけに
そおほしたるやみかと

よのつねのもみちとやみるいにしへのためにひけるにはのにしきをととき
こえしらせ給ふ御かたちいよくねひとゝのほり給てたゝひとつ物とみえさせ
給を中納言さふらひ給かことくならぬこそめさましかめれあてにめてたきけ
はひやおもひなしにとりまさらんあさやかにほはしき所はそひてさへみゆ
ふへつかうまつり給いとおもしろしさうかの殿上人みはしにさふらふなかに弁
の少将のこゑすくれたりなをさるへきにこそとみえたる御なからひなめり